

# ハイスクールDxD ーキ ズナノハナー

北海海助

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ライザーとの事件が終わり、イツセー達はいつもの日常とやらに戻った。

そんなある日、オカルト研究部の部長であるリアス・グレモリーが駒王町の町長に挨拶しに行くと言った。

これが全ての始まり。

この始まりを発端に駒王町に関わる様々な事件にイツセー達は巻き込まれる。

# 目次

第一話 『アイサツ』

1



# 第一話 『アイサツ』

「あいさつ?」

そんな言葉が部室内で消えていった。

兵藤一誠ひょうとういつせいはポカンと気の抜けた顔で目の前で腕を組む我らが部長、リアス・グレモリーに返す。

先日のライザー・フェニックスによるリアス・グレモリー婚約騒動が一件落着して、すぐのことであった。

「どこにですか?」

「町長よ」

「どこの」

「この町に決まってるじゃない」

いたのか町長、とイツセーは心の中で思う。

生まれた頃から住んでいるが、その存在に気づくことはまったく無かった。

隣に並ぶアーシア・アルジェントは手を挙げた。

「あの、どんな方なんですか?」

そんなアーシアの質問にイツセーは考える。

悪魔に転生してから数日。

アーシアの神セイクリッド・ギア器を奪おうとした墮天使レイナーレ、リアスと無理矢理結婚しようとして来たライザー・フェニックスと、中々にハードな生活を送っていたことを思い返す。

そこでイツセーは一つの結論に辿り着いた。

——今までの流れからして絶対にくるくな事にならない気がする……！

と、一人で勝手にビビり始める。

「んー、ドジっばい？」

「なんですか？その可愛い感じ」

「あとツンデレって言うのかしら」

「ツンデレ!?!てことは女の子!!」

イツセーはその完全にお花畑な脳内で巨乳のできるお姉さん系の美女を思い浮かべた。

「え、えへへ」

「イツセーさん！戻ってきてください！」

「え、あ、ごめん」

相変わらざるの反応に、リアスは額に手を当て呆れてため息を一つ零した。

「そう言えば、なんで俺とアーシアだけなんですか？木場とか小猫ちゃんとかは」

「もうとつくの昔にしてるわよ、貴方達は新しい下僕、そしてオカルト研究部の新人だから、報告を含めて挨拶しに行くのよ」

そう言つてイツセーとアーシア率いるリアス・グレモリーはイツセーが転移魔法を使えないということで若干面倒くさそうにしながらも徒歩で行くこととなった。

○○○

「……宝々蘭？」

辿り着いた場所は何処にでもありそうな中華料理店だった。中からは芳ばしい匂いが漂ってくる。

「えーと、なんで中華料理店なんですか？」

「お、おいしそうな匂いがします」

「ええ、この時間帯ならここにいますはずよ」

——中華料理が好きなのかな？

イツセーはツンデレ、大人のお姉さんという勝手な想像をして、勝手に期待し始めていた。

三人は扉を開けて中へと入る。

中の内装は厨房とカウンター、そして何個かのテーブルと椅子というどこにもある中華料理店という感じだった。

「いらつしやい。てアレ、リアスさん？」

「あら鈴、久しぶりね」

店員だろうか。

ピンク色の服に胸元にワッペンを付けた少女がいた。彼女の名前は東鈴<sup>あずまりん</sup>。

「この店の看板娘だ。」

「町長いるかしら」

「ああ、それならそこに」

鈴が指を指した先にいたのはマフラーを首に巻いた綺麗な少女だった。少女はラーメンを食べるのに夢中になっているのか、こちらを見向きもせずに食事し続けている。

「久しぶりね、ヒメ」

「ん？ふおふあ!!ひあす!」

少女は一気に麵を啜り、そしてスープを飲み干して手を合わせて席から立つ。

「久しぶり、コッチに来たってことは新人でも入部した？」

「ええ、ちょうど二人いるわ」

リアスは後ろへ視線を向ける。



ヒメと呼ばれた少女はチラリと視線を後ろへ向けた。

「貴方達が新人？あたしは槍桜やりざくらヒメ、よろしく！」

「よ、よろしくお願ひします」

「よろしくお願ひします」

イツセーとアーシアは差し伸べられた手を握り、握手をする。その数秒後。

「……ちよ、町長おおお!!?」

中華料理店宝々蘭。

その空間に二人の驚愕の声が轟いた。